

日本軍の史料から見る滕県作戦の実記録 —1938年3月16日～18日、中国・山東—

姜 克實*

はじめに

1938年2月から5月にかけて、中国の山東省南部に行われた「台兒荘の戦い」（中国側では「台兒荘会戦」、「台兒荘大捷」と表記する）は、盧溝橋事変から始まる日中戦争の中で、日本軍が対中国軍作戦の中、初めて喫した「大敗北」と言われる。中国では長年にわたる抗日宣伝の影響で、この勝利の戦いは政治化され、いま、愛国主義、民族主義教育の題材に利用されている。また、台兒荘における中国軍側の「勝利」を軸に、滕県防衛戦、臨沂防衛戦、池淮防衛戦を含む諸戦闘を「台兒荘会戦」と称し、「大捷」中心の歴史観まで作り出している。一方、宣伝の割には戦闘の実態に関して必ずしも正確に把握されているとは言えない。中国側ではこの戦いに関する正確な記録史料が少なく、ことに勝利の内容——日本軍の行動記録、消耗、死傷の統計など——に関して皆無の状態である。「大捷」の内容、戦闘場面の還元がほとんど当事者による事後の回想、回顧など不確実な材料によって

行われ、小説、映画などの文芸作品化に伴う加工を経てさらに変形し、いま宣伝され、語られている台兒荘の戦いは、真実と大きく乖離しているのが現状である。

図1（支那事変陸軍作戦（2） 31頁）

一方旧日本軍には、戦闘詳報、統計、報告書などの記録史料が多く残されており、ほとんど宣伝の成分を含まない作戦機密書類なの

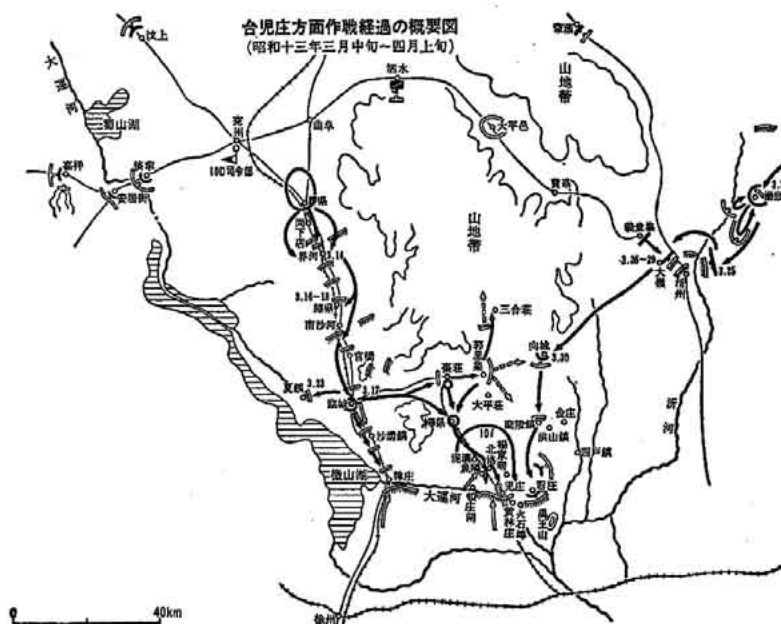


図1

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

で、作戦意図、戦闘過程が把握でき、死傷数字などの統計信頼性は高い。本研究は、こうした日本軍の記録史料によって、台兒荘の戦いの実態を還元する作業の一環である。この文章で「台兒荘会戦」の前哨戦と言われる滕県の戦いを取り上げ、今まであまり知られていなかった日本軍側の動きを、記録データに基づいて、再現したい。

「台兒荘会戦」（日本軍の記録では「第一期南部山東剿滅作戦」）は日本軍第五師団（板垣征四郎中將）の坂本支隊（坂本順少將）による東部沂州方面の戦場と、第十師団（磯谷廉介中將）の瀬谷支隊（瀬谷啓少將）による西部津浦（現在の京滬）鉄道線の戦場に分けられ、西部戦場の中心は滕県、臨城、台兒荘など津浦、大運河の沿線の地域であった。

瀬谷支隊は第十師団第33旅団を中心に組織された歩兵、各種砲兵、軽装甲車部隊、工兵などで構成した混成部隊で、基幹は歩兵第十（岡山）、第六十三（松江）の二個聯隊であった。台兒荘の戦い（4月7日迄）の間で、合計12,000名ほどの人員を擁していた⁽¹⁾。

緒戦となる滕県作戦を担当した第十聯隊は、日本近代の最も早い時期（1874年）に創設された歩兵聯隊の一つであり、西南戦争、日清、日露戦争を経験し、1889年師団制が実施された後、第十師団の主力として、師団本部がある姫路城下に駐屯していた。1924年宇垣（一成、陸軍大臣）軍縮のあと、第33旅団本部とともに解散となった第十七師団の本拠地岡山に進駐し、旅団本部は現在岡山大学内に保存されている旧大学本部の建物にあり、歩兵の兵営は現農学部農場のあたりに位置した。ちなみに現在の文学部のエリアは、第十工兵聯隊の兵営であった。1937年8月盧溝橋事変のあと、ここから動員され中国の華北戦場に赴き、天津の大沽口で上陸してから津浦鉄道（天津、南京間）に沿って戦いながら南下し、12月黄河を渡河して山東省に入り、済南市南の蒙陰、泰安、鄒県一円をしばらく守備した後、南下作戦に参加し、3月8日に編成された瀬谷支隊の主力の一つであった。

1. 参加部隊と装備

1-1. 参加部隊人数

滕県作戦の参加部隊は第十聯隊（聯隊長赤柴八重蔵大佐）を中心とする歩兵及び、上級の第十師団、第二軍から臨時に配属された砲兵などによって構成され、3月15-18日の戦闘における第十聯隊の参加兵員数は2,654（476）名（括弧内は非戦闘員）で合計3,130名であった⁽²⁾。内訳は 聯隊本部171（188）名、第Ⅰ大隊844（87）名、第Ⅱ大隊360（81）名、第Ⅲ大隊795（100）名、聯隊歩兵砲中隊158（13）名、聯隊速射砲中隊90（7）名、混成中隊237名である。中の第Ⅰ大隊の844名（東門攻撃担当）と、第Ⅲ大隊795名（南門担当）の戦闘員は、攻城担当の第一線部隊であった。第Ⅱ

(1) 旅団本部と支隊の予備隊を含まない概数。『歩兵第十聯隊戦闘詳報』『第13号附表』及び『歩兵第六十三聯隊台兒荘攻略戦闘詳報』『歩六三戦詳第十四号附表其二十一』より算出、JACAR: Ref. C11111172600No.1848. C11111254400No.1156.

(2) 「戦闘詳報第十一号附表」、JACAR: Ref. C11111170700. No. 1584.

大隊は遅れて17日の午後に着し、城外の北門、西門外の鉄道駅における邀撃戦に参加したが、攻城の部隊ではない。なお、以上の数には、他の任務についている一部の欠員が含まれず、歩兵聯隊の編成定員上では3,747名であった⁽³⁾。

他に臨時配属の部隊には、独立機関銃中隊151名、野砲兵第十聯隊第I大隊の二個中隊467(4)名、野戦重砲兵第二聯隊(木下滋聯隊長)の二個大隊(16日は一個大隊)、段列の1/2計1,065(180)名、支那駐屯軍砲兵聯隊混成第六中隊184名、同野砲兵中隊106名⁽⁴⁾合計2,157名があり、第十聯隊の数を合わせると、最大時の3月17日には約5,287名、16日は3,934名、18日は3,130名の兵員を擁していた⁽⁵⁾。

1-2. 重火器装備⁽⁶⁾

重火器装備は次のようである。

(1) 92式重機関銃：⁽⁷⁾ 独機関銃中隊1×8挺、機関銃中隊2×8挺、合計約24挺、17日午後の最多時約32挺。他に11年式軽機関銃：12中隊×6挺、合計約72挺

(2) 92式歩兵砲：⁽⁸⁾ 3小隊×2門=6門(第II大隊が遅れてきたため実際4門)

(3) 41式山砲(聯隊砲)：1中隊×4門⁽⁹⁾

(4) 94式37mm砲(聯隊速射砲)：⁽¹⁰⁾ 1中隊×4門

(5) 38式野砲：⁽¹¹⁾ 2中隊×4門、合計8門

(6) 4年式15糎榴弾砲：⁽¹²⁾ 1大隊×12門

(3) 『歩兵第十聯隊史』、同刊行会、1974年、516頁。

(4) 第十聯隊の戦闘詳報には、配属部隊の統計は載っていない。この数字はのち台児荘の戦闘に六十三聯隊に配属された際の統計を借用したので参考数字となる。「歩六三戦詳第十四号附表其十三」JACAR: Ref. C11111253800. No.1105.

(5) 3月16日の計算式は3130+441+151+471+1245/2、3月17日の計算式は3130+151+471+1245+184+104(協力部隊を含む数)、3月18日の計算式は配属部隊を外した数。死傷数が含まれておらず、また、欠員数も正確に把握できないので、いずれも概数となる。

(6) 重火器装備に関しては、歩兵聯隊の装備について『歩兵第十聯隊史』(516頁)のデータにより、それ以外の火砲の種類に関して「歩六三戦詳第十四号附表其十六」(JACAR: Ref. C11111253800. No.1110-1113.)にある各砲兵部隊の消耗弾薬の種類から判別した。

(7) 1933年制式決定、日中戦争で初めて実戦投入された主要な重機関銃、一分隊十数人で操作、運用(弾薬分隊除く)。口径7.7mm、装弾数30発、重量55.3キロ、発射速度450発/分。

(8) 口径70mm、重量204kgの軽便砲、一大隊2門装備(砲兵小隊56名、馬12匹)、大隊砲ともいう。

(9) 各歩兵聯隊に一中隊(4門砲、兵161名、馬49匹)が配備され、聯隊砲ともいう。重量540キロ、口径75mm、発射速度約10発/分。射程が長いため、滕県作戦中、夏村、単家荘(善国村)の後方砲兵陣地に配備され、突撃掩護と敵の火力圧制に使われた。

(10) 各歩兵聯隊に一中隊(砲4門、兵89名、馬21匹)が装備され、聯隊速射砲ともいう。口径37mm、初速700m/秒、砲車重量327kg。近距離の水平射撃で、徹甲弾などを使う。滕県戦闘中、敵前150mまで前進させ、家屋、壁、銃眼などの破壊に使われた。

(11) 口径75mm、砲重量950kg、有効射撃距離約8,000m。日露戦争で使われた旧式野砲で、師団所属の砲兵聯隊から二個中隊が配属された。滕県作戦中、寨門の破壊射撃、敵の火力圧制、歩兵突撃の援護射撃に使われた。17日午後、配属を解かれた。

(12) 1915年制式決定、口径149.1mm、重量2,800キロの野戦重砲、最大射程距離8,800m、主として城壁破壊、目標建物の破壊に使う。

(7) 96式15糎榴弾砲：⁽¹³⁾ 1中隊×2門

(8) 91式10.5糎榴弾砲：⁽¹⁴⁾ 1大隊×12門+1中隊×4門、合計16門

以上合計すると、滕県作戦において日本軍側には最大時重機関銃32挺、軽機関銃72挺以上、火砲七種類、合計54門が投入されていた。

攻城の日本軍と守備の四川両軍を比べると、地理的には四川軍が優勢を占めるが、兵力では、城内守備部隊3,000名の数は⁽¹⁵⁾ 日本軍側の最大数5,300名より劣る。さらに重機関銃、砲兵など重火器の面では、相手の四川軍に比べ、圧倒的な攻撃、破壊力を保有していた。滕県防衛に参加した兵士は、主力の727団の装備は重機関銃全部で4挺にすぎないと証言し⁽¹⁶⁾、滕県落城後における戦場整理では、第十聯隊の鹵獲品には重機関銃が5挺、軽機関銃が9挺、迫撃砲が3門と記録されていた⁽¹⁷⁾。全滅に近い状態なので、たとえ潰走、脱出した敗残兵があっても、軽機関銃以上の重武器の携帯は出来まい。すなわち鹵獲数は守備部隊全部の重火器所有数に近い数字と思われる。日本軍と比べると、その差は歴然である。

さらに、第六十三聯隊史の記録では、四川軍には「約三分の一以上は小銃の装備なく、めいめい手榴弾（屍体から判断すると六発余）を持ちその投てきには相当熟練していた。兵は一般に鞋をはき、…夜間陣前三十米に接近して手榴弾を投じ」る戦法をとっていた、という⁽¹⁸⁾。四川軍は国民党軍の中で「雑牌軍」と言われ、装備が悪く、戦闘力もないと言われた。

1-3. その他について

中国側の《第二十二集團軍・関于滕県戦役の戦闘詳報》によると、滕県戦闘中、日本軍側が「敵機五、六十機」、「戦車及び装甲車百両余り」を投入した、という⁽¹⁹⁾。

まず「戦車」に関して、この時点で瀬谷支隊には戦車部隊が配属されておらず、あるのは第二軍から配属された94式軽装甲車が第10及び第12中隊の合計34両である。車両は全長3.36m 全幅1.62m 全高1.63m 重量3.45tの小型車輛で、砲兵の牽引車両として開発されたが、のち歩兵の戦闘協力に

(13) 1937年制式決定、盧溝橋事変時から支那駐屯軍に実戦配備した日本軍最新式の榴弾砲、重量4,140kg、口径149.1mm、砲身長3,523mm、最大射程11,900m。

(14) 1931年制式決定、砲口径105mm、最大射程10,800m、重量1,500キロ。徹甲弾、尖鋭弾、榴弾いずれも使える用途の多い大型火砲。

(15) 四川軍第122師戦闘詳報では参加者3,714名となっているが、滕県戦闘前の死亡（界河の戦闘などで）及び未入城の部隊もあると考えられる。なお、16日夜城内に入った124師370旅の場合、兵員2,159名、死傷者1,006名となっている（山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》山東人民出版社、済南：1992年、26頁、35頁）。

(16) 滕県守備の727団全部で4挺の重機関銃しかないという。前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》52頁。

(17) 「第122師武器弾薬損耗表」、山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》山東人民出版社、済南：1992年、27頁。

(18) 『歩兵第六十三聯隊史』（同刊行委員会、非売品）1974年、336頁。

(19) 122師戦闘詳報、前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》15頁。同書には、この類の証言が複数見られる。

も転用された。二人乗りで、車載軽機関銃一挺しかないため戦闘車両として火力が弱い。一方、機動性、悪路走行の性能がよいので、平坦地の戦闘に重宝視され、「豆戦車」と呼ばれた。しかし、この車両は滕県作戦には使用されていない。記録を見ると、二個中隊とも臨城に向かう第六十三聯隊の快速挺進隊に配属されている⁽²⁰⁾。つまり、六十三聯隊が担当した滕県周囲の戦闘（南沙河、官橋など）ならとにかく、滕県の攻城（第十聯隊）にはいかなる「戦車」も「装甲車」も使われた記録はない。確かに台兒莊戦闘の3月28日から、攻撃担当の瀬谷支隊第六十三聯隊に支那駐屯軍臨時戦車隊の一中隊（中戦車7、軽戦車5）⁽²¹⁾が戦闘序列に加わったことは事実であったが、それが瀬谷支隊に配備されたのは3月26日以降であった⁽²²⁾。

飛行機に関しても、数十機の爆撃機が、終日戦闘に参加したとの中国側の記述も事実と合わない。第二軍に対して、北支方面軍の臨時航空兵団から、中平部隊の偵察機二中隊（12機×2）が協力部隊として派遣され⁽²³⁾、中の内田中隊（88式偵察機×12機）は瀬谷支隊を含む第十師団の指揮下においた。使用された機種は第十聯隊の記録では88式偵察機となっているが、航空兵団の記録には「94〔式〕機」の記録もある。複数の記録を見れば、この「内田中隊」は主として敵情の偵察、図面の作成、部隊間の連絡（通信筒の投下）に使われている。一方、88式偵察機の性能を見れば、機関銃3挺、定員2名のほか、軽爆弾の携帯も可能である。従って通信、偵察の任務のついでに、敵陣地に爆弾数個を投下したことも否定出来ない。

ただ、臨時航空兵団の記録では、滕県攻城の3月17日、華北全体にわたる北支方面軍の戦闘地域に「偵察機17機、戦闘機9機、軽爆撃機2機、重爆撃機5機、輸送機5機」しか出動されておらず、中に「内田中隊 兗州飛行場ニ在リテ直接瀬谷支隊ノ戦闘ニ協力シ彼我ノ状況ヲ搜索シ指揮連絡ニ任ス 又林〔臨〕城附近ニ於テ敵列車ヲ爆撃セリ」と任務を記録されている⁽²⁴⁾。

臨時航空兵団の偵察機四個中隊の中、17機しか出動されていないとすれば、瀬谷支隊に協力する内田中隊の偵察機出動は、精々4、5機であろう。しかも数発しかない軽爆弾を、滕県ではなく、臨城の方向における列車爆撃（六十三聯隊の戦闘エリア）に投下するよう命令されている。

以上から判断すれば、16-17日の滕県作戦中、内田中隊の偵察機数機が搜索、連絡のため、複数回滕県上空を巡回したとしても、大規模な編隊爆撃を行ったとは考えられない。

毒ガスの使用に関しても中国側の記録にもあるが、第十聯隊の戦闘消耗表を見ると、攻城の際、第Ⅰ、第Ⅲ大隊は合計「丙催涙筒」（みどり）65個を消耗した記録が残されている⁽²⁵⁾。該兵器の

(20) 「歩六三戦詳第十四号附表其十三」参照、JACAR : Ref. C11111253800. No.1105.

(21) 『戦史叢書 支那事変陸軍作戦(2) 昭和十四年一月まで』防衛庁防衛研修所戦史室著、朝雲新聞社、1975年35頁。

(22) 『機情第七十七号』Ref. C11111034800. No.1005

(23) 全部で四中隊、第一軍と第二軍に各二中隊が分配された。なお偵察機の機種は88式と94式であった「航空兵団戦闘要報送付の件(2)」JACAR : Ref. C04120316400. No.974. No.980.

(24) 「航空兵団情報記録(地上)」JACAR : Ref. C04120316300. No.886. No.894.

(25) 「歩兵第十聯隊戦闘詳報第11号附表」を参照（前掲JACAR : Ref. C11111170700. No.1587.）なお、「支那事変歩兵第十聯隊第一中隊戦誌」の図面にも、城下で「新田伍長ミドリ発煙」の記録がある。（3月17日条）、一中隊白山会、非売品。

用途は「警務用トシテ稍凶暴ナル群集ヲ駆逐シ或ハ持凶器凶暴犯人逮捕ニ際シ使用ス」とあり、成分は四塩化炭素及ベンゾールで⁽²⁶⁾、敵の戦闘能力を減退させる補助兵器（催涙ガス）で毒ガスとは言えない。

2. 3月16日の戦闘記録

2-1. 戦闘の準備

第十聯隊は六十三聯隊の後を追って、15日午前、界河南の房嶺（村）に集結した後、11時（以下11：00の形で表記）、左縦隊の行進路線に沿って東迂回路に入り、范家庄、龍山南麓を通過して東郭（滕県北東10キロ）を目指した。この時受けた支隊命令は「正午出発鉄道線東方地区ヲ迂回シ翌十六日東方ヨリ滕県ヲ攻撃スルコト」であった⁽²⁷⁾。なお、14日から一日目の戦闘において、右縦隊の第十聯隊（第二大隊欠）の兵員数は2,553名で、死者3、傷10名であり⁽²⁸⁾、正面の敵兵力は1,500名で、与えた損害は「遺棄死体」250であった⁽²⁹⁾。

東郭に到達したのは20:50、南への王廟道に入り、「大呉溝」（正字〈大郭溝〉）に至り、瀬谷支隊長から作戦命令第十一号を受領し、また「赤作第八号」聯隊命令を下达し、「諸隊ヲ開進ノ配置ニ就カシ」めた⁽³⁰⁾。「大呉溝」（大郭溝）より、第十聯隊は南に向かう王廟道を離れ、南西に折り返し、姜家楼（現在江楼村）、万庄、小公（宮）山一円で夜を明かし、西方東沙河鎮の方向に威力偵察を展開しながら、滕県東部に接近し⁽³¹⁾「滕県附近ニハ大ナル敵ナキモノト判断」せりと、瀬谷支隊に報告した。そして支隊より「即時攻撃前進」の命令を受け、16日朝、滕県東側と南側より戦闘態勢に入った⁽³²⁾。

図2（磯情第五十号、Ref. C11111034700.No.974）。

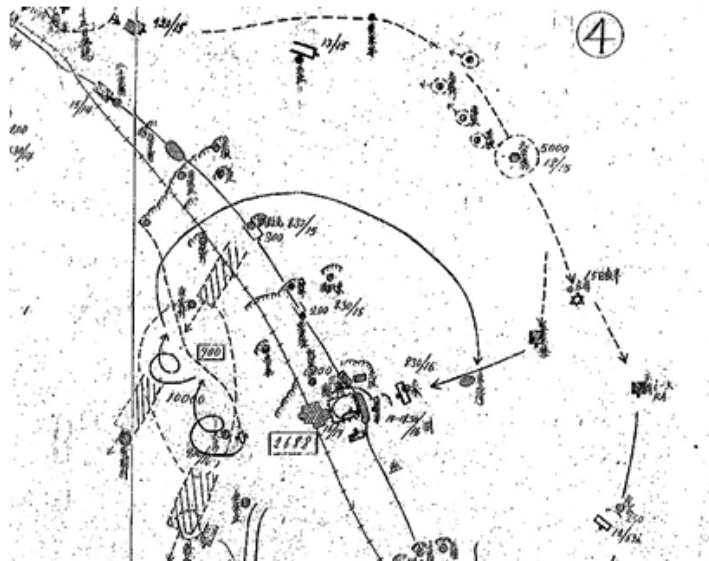


図2

⁽²⁶⁾ 「手投弾薬八九式甲・乙・丙・〈みどり〉簡説明書送付の件」JACAR：Ref. C01003950800.No.802.

⁽²⁷⁾ 「界河西方地区戦闘詳報（第十号）」JACAR：Ref. C1111169900.No.1436.

⁽²⁸⁾ 「戦闘詳報第十号附表」JACAR：Ref. C1111169900.No.1444.

⁽²⁹⁾ 「磯情第六十五号」JACAR：Ref. C11111034600.No.924.

⁽³⁰⁾ 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200.No.1451.

⁽³¹⁾ 「歩兵第十聯隊開進配置要図」を参照。JACAR：Ref. C11111170400.No.1551.

⁽³²⁾ 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200.No.1454.

2-2. 3月16日の戦闘

2-2-1. 徹底抗戦の姿勢

この日藤県の戦闘に参加したのは、第十聯隊の歩兵二個大隊計2,689名（内訳歩兵中隊5、聯隊砲兵中隊2、機関銃中隊2など）、外に配属された独立機関銃中隊（約151名）、野砲兵第十聯隊第I大隊の二個中隊（471名）、野戦重砲兵第二聯隊第I大隊（約623名）を合計すると、総勢3,934名であり、重火器には92式重機関銃24挺、各種火砲34門があった。

城内の敵数について、聯隊が得た情報では「少数」で約300名と推定しているが、実際15日夜の時点で四川軍第122師、124師の二つの司令部を始め、各種の武装で約3,000名が城内とその周辺にいた⁽³³⁾。16日の午前10時、赤柴聯隊長は捕虜からの情報で、守備責任者王銘章師長の「藤県城ノ死守」命令と、城内の敵数「少ナクモ約三個団アル」ことを知った⁽³⁴⁾。

一方、この日の午前、津浦鉄道に15-6両編成の列車が、兵員を満載して南へ退却するのを、第I大隊が目撃し、その後11:00、75mm列車砲を装備した南進装甲列車の編隊も発見し、砲撃を交わした。鉄道線路に進出した第III大隊も午前中、城外の部隊は列車で大量に臨城の方（南）に撤退した様子を記録している。さらに内田飛行中隊の偵察によれば、「午前9時頃」、藤県の西側南北一線に「約一万西南方ニ潰乱中」、「午後0時30分頃敗退スル敵ノ位置ハ藤城、高廟、旗官附近ニ在リ其数一万」であった。潰乱の敵に対して、内田中隊は三機編隊の爆撃で攻撃し、第六十三聯隊に配属した軽装甲車中隊も藤県西に「潰走スル敵ノ大部隊」を「蹂躪シ遺棄死体六（七）〇〇ノ損害ヲ与ヘタリ」。磯情によれば、これらの部隊は主として127師と125師であった⁽³⁵⁾。これらの情報を分析すると、すくなくとも16日の午前まで、四川軍（41軍）はまだ藤県死守の心構えをしておらず、藤県外周で作戦する部隊は（122師以外の部隊第124、127師の一部と思われるが）が日本軍との直接対決を避け、次々と南（臨城方向）に撤収したと思われる。わざわざ列車で迎えに来た気配から、第41軍の首脳部（孫震司令）も、この撤退を認可したのであろう。しかし、16日午前、「委員長」蒋介石からの指令電報を受けてから、孫震第41軍司令官は態度を一転する。「誰一人城外に出るな、命令違反者は容赦なく即時銃殺」と、藤県城の死守を厳命した。この命令を受け王銘章は、城外に出て「運動戦」をする念頭を諦め、城外の電灯廠にある司令部を城内に移し、出入り口の東、北、南門の三箇所を土嚢で封鎖して援軍が来るまで城を死守する決意を固めた。またすでに城の西南部に「潰乱」中の部隊（磯情によれば、127師）も、官橋や、城南方五キロの南沙河の陣地に入り、抗戦の姿勢を構えた。夕方になると、城外の124師の一部も応援のため入城し、徹底抗戦の準備を整えた⁽³⁶⁾。

(33) 張宣武「悲壯之役親歴記」、前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年藤県抗日保衛戦》53頁。なお張はこの時122師727団長で、守備責任者の一人であった。

(34) JACAR : Ref. C11111170200. No.1464.

(35) 「磯情第六十六号」JACAR : Ref. C11111034600. No.932、949、950。

(36) 張宣武「悲壯之役親歴記」前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年藤県抗日保衛戦》54-56頁。

2-2-2. 第I大隊

戦闘は、第I大隊（末永光夫少佐）が担当する城東方向からの攻撃と、第三大隊（岡清三郎少佐）が担当する城南方向からの攻撃に分かれ、東（東関）を担当したのは、第I大隊の第1、第3、第4中隊、歩兵砲中隊、及び配属の独立機関銃中隊、聯隊の速射砲中隊であった。

部隊は08:00（膝県城南東2キロ）夏村西端に到達し、まもなく、北方の小高い「土城子」を占領し、08:40城東南北に流れる川（城河）にそって展開した。川西と外城の間にさらに南北にのびる地隙があり、この地形を利用すれば、外城寨壁の200mのところまで接近できる。

聯隊砲（41式山砲）4門は土城西に据えられ、重機関銃は川西岸で一列に配置した⁽³⁷⁾。

図3（膝縣付近敵情要図Ref. C11111170400. No.1552）

なお、聯隊の測定記録によると、膝県の内城壁は高さ20m、上部幅5m、城外の水濠は幅10m、深さ8mであった。「其規模ノ雄大ナルコトハ実ニ支那城壁中ノ尤モナルモノニ属ス」と、戦闘詳報も感嘆させられるほどである⁽³⁸⁾。内城壁を守るように城壁外に住宅の密集地域があり、東部分の外側はもう一層の壁に囲まれていた（外城）。外城の壁は 高さ2m上部幅0.4mと、戦闘詳報に記録されている。

10:20 師団野戦砲兵聯隊第I大隊の二個中隊（38式野砲8門）が到着、夏村西に陣地を敷き11:00、南下する装甲列車を発見、互いに砲撃した。

少し遅れて11:15、配属する野戦重砲兵第二聯隊の第I大隊（91式105mm榴弾砲12門）も到着し、東関の寨門に向け試射開始をした。先着した野砲大隊の観測データを利用して、「第一弾ヨリ城門ニ命中シ猛烈ナル爆音ト其威力ハ思ハス快哉ヲ叫ハシメタリ」と、戦闘詳報は記す⁽³⁹⁾。

12:00、第3中隊は東寨門の突破口に突入を試みたが、守備側の執拗な抵抗と手榴弾の攻撃を受け

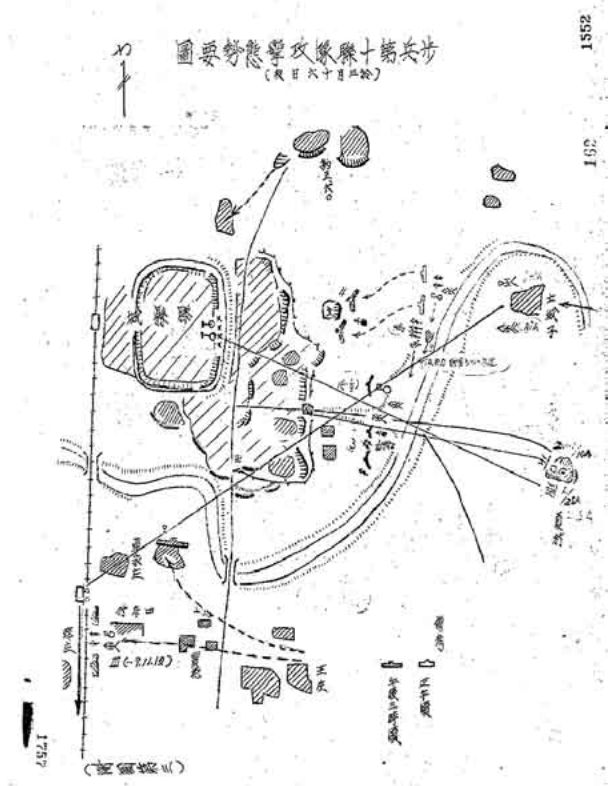


図3

(37) 「歩兵第十聯隊攻撃態勢要図・於三月十六日夜」 JACAR : Ref. C11111170400. No.1552.

(38) 「膝縣附近戦闘詳報（第十一号）」 JACAR : Ref. C11111170200. No.1459.

(39) JACAR : Ref. C11111170200. No.1467.

損害が続出。一旦後退して再び砲火で圧制する戦法に転じた。このような、強い砲火を頼りに、突撃、砲撃を繰り返す戦術は、四川軍の戦闘記録にも記されている⁽⁴⁰⁾。

一方、四川軍側は、敵の砲撃被害を避けるため、城外に暴露の塹壕陣地を作らず、寨壁、家屋の銃眼よりの射撃で対抗し、敵の突撃隊が突破口に接近すると、一斉に手榴弾を投擲する戦法で対抗した。

14:00第二回目の集中砲撃により、城（寨）門は完全に破壊され、14:15地隙を利用して接近した第3中隊は突撃を行い、一気に東寨門に突入して市街地の一角を確保した。

爾後極力日没迄ニ戦
果拡張ニカメシモ敵
ノ抵抗頗ル執拗ニシ
テ著シク進展セス第
一大隊ハ更ニ夜ニ入
ルモ攻撃ヲ続行シ諸
種ノ手段ヲ竭シテカ
行セリ十七日払暁時
ニ於ケル態勢附図第
四ノ如シ

寫景圖第一



図4

図4 (写景図第一-Ref. C11111170500. No.1556)

この時、突入したのは第3中隊の一部で、約50名と推測する。しかし、各方向からの激しい狙撃を受け、市街地での戦果拡張はうまく行かず、東寨門近辺の一角を占領したまま、夜を迎えた。

⁽⁴⁰⁾ 前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》、239頁。

2-2-3. 第三大隊

一方、第三大隊（895名）は、16日午前六時、「左第一線トナリ午前八時半迄ニ黄家荘、王荘ニ亘ル間ニ展開シ滕県南側小流以南ノ敵ヲ攻撃シ、鉄道線路ノ線ニ進出スル如ク攻撃ヲ準備スヘシ」の「赤作第九号」聯隊命令⁽⁴¹⁾を受けて、滕県の南方に迂回した。その後通信障害で一時、聯隊との連絡が途絶える。

10:20 滕県城南2,500m処の王荘（現在王開村）に到着し鉄道に沿って北上してきた五、六両連結の空車（収容列車）を砲撃して南下させ、つづく11:00滕県から南進してきた75mm砲のある装甲列車隊を射撃した⁽⁴²⁾。この列車はのち、南沙河で城外作戦を担当する第六十三聯隊によって拿捕されることになる⁽⁴³⁾。

図5（滕県外城攻撃要図、『歩兵第十聯隊史』、513頁より）。

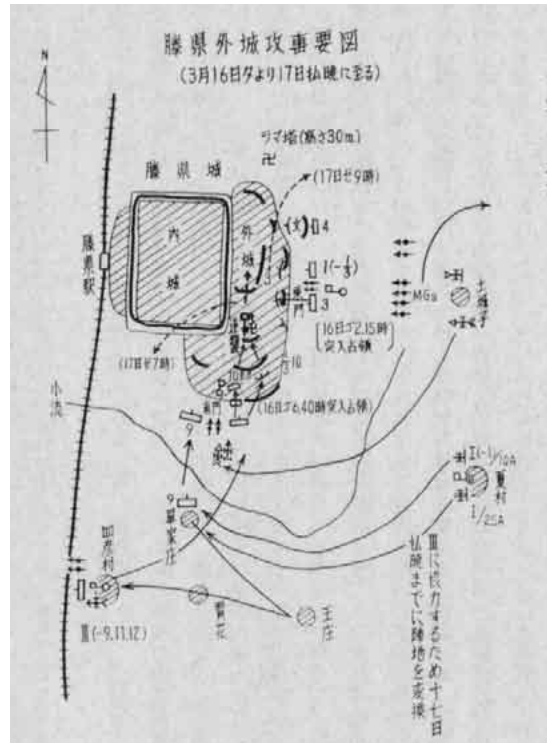


図5

第三大隊は王荘から滕県に向けて北進し、12:00 賈花（賈庄）を掃蕩した後、鉄道東の「四彦村」（西寺院村）に到着した。ここで、線路西で南に退却する7-800名の敵部隊を見つけ攻撃を加えた。朝から鉄道沿線で南に退却する敵部隊は「目セルモノ其数二千下ラス」、と戦闘詳報が記す⁽⁴⁴⁾。南下退却する敵を邀撃するため、第三大隊は五里河（現在滕南中学校附近）に一小隊の歩兵と一小隊の重機関銃（2挺）を残したまま、河（城河）に沿って東へ、14:00、滕県外城の南寨門附近に到着した。ここで、14:10やっと聯隊本部と連絡できるようになったのである⁽⁴⁵⁾。

第一大隊が東寨門に突入した後、第十聯隊の重砲は南寨門破壊のため、夏村から城南の単家荘（善国村）に移動され、聯隊砲、独立重機関銃中隊（8挺）も第一大隊から第三大隊に配属転換された。15:00野戦重砲大隊の火砲は南城門望楼、また城内の軍事要点に対して圧制、攪乱射撃を開始し、続いて突破口の南寨門に、集中砲火を浴びせた。

(41) JACAR : Ref. C11111170200. No.1456.

(42) JACAR : Ref. C11111170200. No.No.1464.

(43) 「滕縣南方地区に向ふ機動及南沙河附近の攻撃」 JACAR : Ref. C11111252500No.742.

(44) 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」 JACAR : Ref. C11111170200. No.1469.

(45) JACAR : Ref. C11111170200. No.1470.

17:00 第Ⅲ大隊第10中隊が単家莊東方800m処の地隙を利用して南寨門に接近し、18:40薄暮に乗じて一気に外城（東関）内に突入した。この攻撃について、戦闘詳報では、第10中隊は敵情不明のまま薄暮を利用して果敢に攻撃を行い、また聯隊砲中隊も「敵前百米ニ接近シ月明ヲ利用セル夜間射撃」を敢行したため功を奏した、としている⁽⁴⁶⁾。

一方、突入した第10中隊は、第Ⅰ大隊方面の突撃隊と同じように、市街地で激しい抵抗、狙撃を受け、寨門附近の一角を占領したが、戦果拡張がうまく行かず、第Ⅰ大隊方面とも連絡を取れないまま、民家の一角に立て籠もって一夜を明かした。

図6（膝縣付近敵情要図Ref.

C11111170400, No.1553)

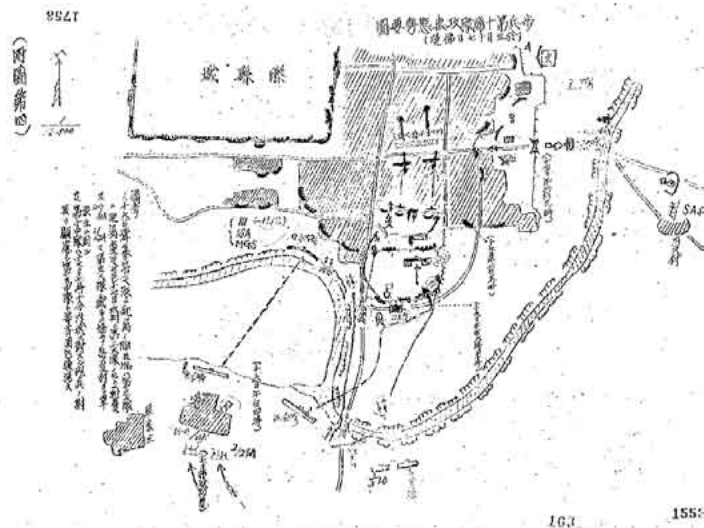


図6

こうして、第十聯隊の攻城部隊は16日、優勢な重火器の支援を受け、東、南の二箇所から外城（東関）内に突入したが、城内市街地での激しい抵抗に阻まれ、戦果拡張はうまく行かなかった。戦闘詳報では、「終夜ニ亘リ戦果拡張ニ努メ十七日払暁漸クシテ第一大隊ト連絡シ第一、第三大隊間ノ城外ノ敵ヲ完全ニ掃蕩スルヲ得…」と記しているが、実際、それ以外の大半の地域を制圧しておらず、外城を略制平定して内城壁に接近できたのは、翌17日午後二時以降であった⁽⁴⁷⁾。

この日の苦戦ぶりについて、戦闘詳報では

十六日朝来勉メテ城内ノ破壊ヲ避ケ膝縣占領ノ目的ヲ達成セント努力セシモ敵ノ抵抗意外ニ頑強ニシテ加フルニ市街戦ノ特質ハ益々戦闘ヲ膠着セシメ戦況ノ進展予期ノ如クナラス延テハ敵ヲシテ益々抵抗意識ヲ助長セシムルニ過ギザルコトヲ痛感シ今後ノ戦闘指導ハ断乎トシテ深ク決スル所アリ仮令膝縣城ヲ灰燼ニ帰セシムルコトアルモ已ム得ザルヘク…。殊ニ上司ヨリ特ニ注意セラレアル外国權益擁護ノ裏面ニ隠レ敵軍ニシテ却テ城内外国建築物付近ヲ占拠セル關係上…努メテ該地域ニ損害ヲ波及セサランコトニ努力スルハ無論ナルモ余リニ之ニ深慮ヲ抱キ活発ナル行動ヲ減殺スルハ一考ヲ要ス⁽⁴⁸⁾

⁽⁴⁶⁾ JACAR : Ref. C11111170200, No.1471.

⁽⁴⁷⁾ JACAR : Ref. C11111170200, No.1470.

⁽⁴⁸⁾ JACAR : Ref. C11111170200, No.1472.

と記す。市街戦がうまく行かなかった理由を、当初「城内ノ破壊ヲ避ケ膝県占領ノ目的」、ことに「上司ヨリ特ニ注意セラレアル外国權益擁護」のため、建築物の破壊が徹底せず、ために敵の抵抗意識を助長した、としている。今後「膝県城ヲ灰燼ニ帰セシムルコトアルモ已ム得ザルヘク」と強い焦土化作戦の意志を示した。

この「外国ノ建築物」は、内城壁に近い、ドイツの天主堂を指す。以上から判断すれば、膝県攻撃に当たって、一、当初から、できれば城内を破壊せず占領する作戦の意図があり、また、二、上から、第三国の權益に損害を与えないような命令があったと考えられる。

3. 3月17日-18日の戦闘記録

3-1. 命令、計画、参加部隊

臨城の一气攻略を企んだ瀬谷支隊長は、16日における膝県攻城の遅れに焦りだし、16日深夜23:00、催促ともいうべき「瀬支作命第十四号」を下達した⁽⁴⁹⁾。第十聯隊に翌17日午前をもって膝県城を陥落させ、掃蕩が終了後、午後から瀬谷支隊の前衛部隊を追って臨城に出発せよ、という内容であった。

「膝県は掃蕩どころか、まだ本格的な県城攻撃にも着手していない困難な情況なのに、旅団には分かっていない風だった」と、第三大隊長岡清三郎がこぼす⁽⁵⁰⁾。

瀬谷支隊長の命令に沿って、17日02:30、赤柴聯隊長は「赤作第十号」命令を出し、17日一部の掃蕩部隊を残し、主力は臨城に向け前進せよ、と指示した。本気かどうか分からないが、赤柴も半日で膝県を攻略できると楽観に考えていたようである⁽⁵¹⁾。

構築堅牢の本城の攻撃をよりスムーズにするため、瀬谷支隊長はあらたに臨城に向かう途中の野戦重砲兵の約二大隊を、一時の戦闘「協力」（臨時借用）の形で赤柴聯隊長の指揮下に置いた⁽⁵²⁾。こうして17日における膝県攻城の兵力は、午後二時から戦闘序列に参加した第二大隊、及び「戦闘協力」の野戦重砲兵第二聯隊の一個大隊、支那駐屯軍の二個砲兵中隊を加えると、総勢約5,287名となり、重火器にも、あらたに野戦重砲兵第二聯隊一個大隊の91式105mm榴弾砲6門 4年式150mm榴弾砲6門、支那駐屯軍野戦重砲兵第三大隊（二個中隊）の91式105mm榴弾砲4門、96式150mm榴弾砲2門が加えられ、合計38門重砲（聯隊砲など含めると延べ52門）になり、重機関銃も、午後戦闘に参加した第二大隊の持ち分を加算すると延べ32挺となった。

(49) 「瀬支作命第十四号」JACAR : Ref. C11111170300. No.1515.

(50) 「岡清三郎手記」『歩兵第十聯隊史』、同刊行会、1974年、522頁。

(51) 「膝県附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR : Ref. C11111170200. No.1473.

(52) 「瀬支作命第十四号・別紙」JACAR : Ref. C11111170300. No.1519.

3-2. 戦闘過程

3-2-1 砲撃

一時間でも早く突撃通路を確保するため、17日払暁四時、東関（外城）内の一角を占拠した第Ⅲ大隊第10中隊（海野大尉）は外城内の掃蕩を始めた。攻撃の目標は、外城内敵の有力拠点である「寺院地陣地」である。攻撃と逆襲で激しい戦闘が続き、朝七時半になっても一向に功を奏せず、まもなく重砲兵の破壊射撃が開始するため、中隊はやむを得ず掃蕩部隊を撤収した⁽⁵³⁾。

師団野戦砲兵第Ⅰ大隊（木下滋大佐）の二個中隊（8門）、野戦重砲第二聯隊の第Ⅰ大隊（12門）は城南部の単家荘（善国村）に据えられ、支那駐屯軍の重砲6門、野戦重砲兵第Ⅱ大隊の重砲12門は城郊東南部の夏村に布陣し、07:30より試射を始めた。一時間ほどの攪乱砲撃の後、09:00城壁の破壊砲撃を開始し、目標は東門南40m処及び、東南角望楼西20m処の二箇所、それぞれ、第Ⅰ大隊、第Ⅲ大隊の突撃のための突破口作りであった。支那駐屯軍の砲兵大隊には、当時日本軍にして最新式の96式150mm榴弾砲が装備されており、東門附近の砲撃では、わずか50発の砲弾で、突破口を完成した。さらに城内の施設を有効に破壊するため、観測班の家形中尉は10:00、城東のラマ塔（龍泉塔）を襲撃してこれを占領し、30mの高所から城内の着弾点を逐一報告し、破壊射撃の精度を高めた⁽⁵⁴⁾。集中砲撃により、城内で火災が発生し、時折の強い南風にあおられ煙は城内を包蔽した。この砲撃はまた、城壁、城内の軍事施設だけではなく、いまだ掃蕩未完了の城外東関の市街地にも加えられた。

約二時間弱の砲撃で、二箇所の突破口を完成させたが、外城東関の市街地の掃蕩が終わっていないため、突破口に接近するすべはなかった。ちょうど砲撃中の08:40、臨城に向かうため瀬谷支隊長は藤県に立ち寄り、聯隊本部の夏村で戦況報告を聞いた後、官路口に出發した。その際、重砲の使用期限は「九時までから正午迄延長しても差し支えなし」と赤柴聯隊長に伝えた⁽⁵⁵⁾。

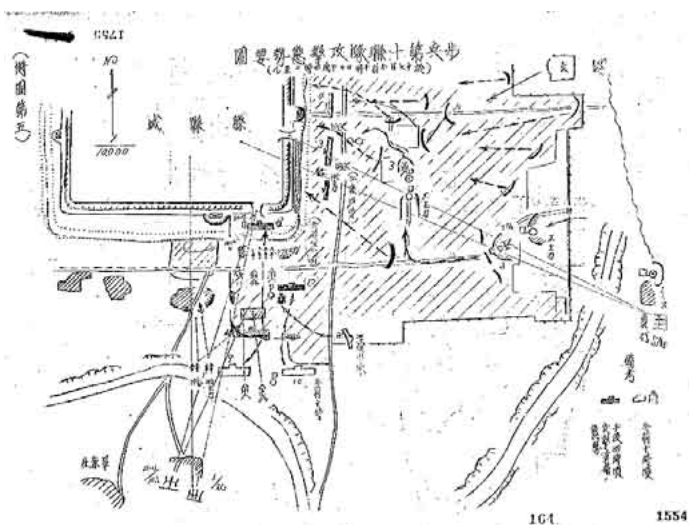


図7

(53) 「岡清三郎手記」『歩兵第十聯隊史』、同刊行会、1974年、522頁。

(54) 「藤縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1479.

(55) JACAR：Ref. C11111170200. No.1480.

3-2-2 市街戦の膠着

しかし、重砲がいくら猛威を振るうとも、四川軍の抵抗を挫けなかった。砲撃後、歩兵が突撃態勢に入るやいなや、隠れた敵兵が現れて抵抗を続けた。

図7 (滕縣付近敵情要図Ref. C11111170400. No.1554)

午前十時ニ至ルモ、城外ノ掃蕩ハ未タ完了セス寧口敵ハ逐次城壁外ニ増加シ其抵抗益々執拗トナル⁽⁵⁶⁾。

第I大隊ハ依然第三中隊ヲ以テ東関部落ノ掃蕩ニ任セシメアルモ敵ハ一步一步家屋ノ銃眼ヲ利用シ道路ヲ縦射或ハ側射シ或ハ手榴弾ヲ投擲シテ極力我前進ヲ妨害ス⁽⁵⁷⁾。

犠牲を少なくするため、突撃部隊は路地の行進を避け、工兵による爆破作業で家屋の壁を破壊し、速射砲を至近距離に進めさせ敵の銃眼を狙い撃ち、一院ずつ落として進路を開拓していくという苦しい戦法を強いられ、いたずらに時間を空費した⁽⁵⁸⁾。

戦線の膠着に焦った赤柴聯隊長は、戦闘指導のため自ら11:50夏村司令部を出発し、苦戦する第I大隊の攻撃現場に到達した。速射砲の後ろで第I大隊長末永光夫少佐と共に突撃を指導している処、「午後一時過ギ側方百米ノ距離ヨリ敵小銃ノ狙撃ヲ受ケ左背部」を負傷し、東寨門内の大隊本部に運ばれた⁽⁵⁹⁾。

こうして約四時間の激しい攻防のすえ、午後二時頃、ようやく外城の掃蕩が完了したが、第3中隊が東門附近の突破口に接近したところ、今度は城壁下の深い濠に阻まれた。濠は予想以上に広く、深かったため、工兵が用意した梯子の尺度が足りず、おまけに城門突出部の望楼からの激しい銃火の側射撃、手榴弾の投擲を受け、結局突破口まで辿り着くことができなかった。

この時、南から攻める第III大隊も同じように捗らなかった。水田第9中隊を先頭に、10:00外城から突撃を開始したが、「午後一時三十分ニ到ルモ、城壁ノ手前一〇〇米デ停止スルノ已ムナキ状態」にあり、一步も前進できない窮地に立たされた。砲兵に進路の開拓を要請するため、一旦下がって応援射撃を待つことになった⁽⁶⁰⁾。

3-2-3 四川軍の士気崩壊

この間14:00頃、守備任務から戦闘序列に復帰する第II大隊第5、6中隊、第I大隊の第2、第III大隊の第12中隊合計800名ほどの増援部隊が、北門外に到着し、14:40、赤柴聯隊長より「直チニ滕県

⁽⁵⁶⁾ JACAR : Ref. C11111170200. No.1481.

⁽⁵⁷⁾ JACAR : Ref. C11111170200. No.1482.

⁽⁵⁸⁾ JACAR : Ref. C11111170200. No.1482.

⁽⁵⁹⁾ JACAR : Ref. C11111170200. No.1483.

⁽⁶⁰⁾ 「岡清三郎手記」『歩兵第十聯隊史』、同刊行会、1974年、523頁。

駅ヲ占領シ敵ノ退路ヲ遮断」する命令⁽⁶¹⁾を受け、駅の方向に進出した。

この前後から、徹底抗戦の城内の守備態勢が乱れ始め、14:30、野戦重砲兵の観測班長から「滕県西方五里屯付近ニ約五〇〇ノ敵退却中」⁽⁶²⁾と城内の敵が退却した情報が報告された。この撤退に関して、四川軍の戦闘詳報にも記録されている。砲撃を受け「戦闘力を失った、城内及び城東南部の友軍の一部は、命令を受け五里屯に転進した」という⁽⁶³⁾。

この500名は、王銘章の部下（122師）ではなく、124師372旅の部隊であったが、一部の撤退は、城内の士気に不利な影響を与えたと思われる。待ちわびた友軍の援軍は到着せず、おまけに敵のほうは兵力が増強され、西門からの唯一の退路も切断された。王銘章はとうとう観念し、午後三時、「…小職は委員長（蒋介石）成仁（玉碎）之訓、開封で頂戴した嘉慰の辞を心に銘し、最後の突撃を敢行しお国に報い、委員長の知遇に謝す」⁽⁶⁴⁾と最後の電報を打ってから、城内と外部との連絡が途絶えた。

3-2-4 城内突入

第9中隊は、第一回目の突撃が失敗したが、その後砲兵による压制砲撃を要請し、15:30、突撃を再開した。

敵ハ我砲兵ノ射撃止ムヤ破壊口附近ニ蟄集シ来リ熾ニ手榴弾ヲ投シ、其爆音実ニ凄ク容易ニ突入スルヲ得ス⁽⁶⁵⁾

先頭ニ突入セル第二小隊（長安田少尉）ノ第一分隊ハ敵手榴弾ノ為大部損害ヲ受ケ僅ニ二名ノミ突入シ得シ状況ナリ…如斯敵手榴弾ノ為死傷セル者多ク第九中隊ハ其数四十八名ニ上ル⁽⁶⁶⁾。

ついに16:05、第9中隊の安田少尉が率いた第二歩兵小隊は城壁に突入し、その後「西側城壁ニ向ヒ戦果ヲ拡張」し、城壁を伝って南城壁、南門から、西城壁に移り、西門を制圧した後、「午後六時三十分内城西北角近クニ達」した。

「其抵抗最後迄頗ル頑強ニシテ突撃ニ方リテハ我ニ組ミ付キ来リ遂ニ格闘ノ後城壁一角ヲ占領セシモノニシテ城内掃蕩ノ際モ尚手榴弾ヲ投シ極力抵抗セリ」⁽⁶⁷⁾。

(61) 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1484.

(62) 124師372旅（3.16夕方、増援のため滕県内、周囲、東関にはいる）の戦闘詳報によると、17日12：00以降城内の潰乱した友軍の一部を、命令で五里屯に転進したとの記録がある。

(63) 前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》42頁。

(64) 前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》204頁。

(65) 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1484.

(66) 「写景図第三」JACAR：Ref. C11111170500. No.1558.

(67) 「磯情第六十六号」JACAR：Ref. C11111034600. No.955.

第9中隊に続いて、突破口付近で待機した海野第10中隊も突破口から城内部に入り、市街地を掃蕩しながら西門に進撃した。

図8 (写景図第三Ref. C11111170500. No.1558)

我野砲大隊並独立機関銃及第三大隊重火器ハ逐次其射弾幕ヲ我突撃歩兵ノ前方ニ移動シテ完全ニ敵ヲ制圧シ最モ緊密ナル協カヲナススクシテ完全ニ退路ヲ遮断セラレタル敵ハ西門付近ニオイテ我ガ城壁ヨリスル手榴弾ノ投擲並小銃軽機ノ射撃ニヨリ屍山ヲナス惨状ヲ呈シ又全ク囊中ノネズミトナル⁽⁶⁸⁾



図8

3-2-5 西門の惨劇

こうして、第9中隊は、城壁の上で西門に迫り、第10中隊は三つの方向に分かれ、市街地を掃蕩しながら西門に進撃した。この挟み撃ちで王銘章部隊の指揮系統が麻痺し、有効な抵抗もなく、逃げるため唯一開口のある西門に殺到した。まもなく、城壁の上に第9中隊が現れ、高所から機関銃と手榴弾で西門から脱出しようとする四川軍の大集団に殲滅的打撃を加えた。安田少尉の記録である。

外門と内門の間は全く人の渦だ 督戦隊に閉め込みを食わされて今更内に入るわけにもゆかず
 あの中で押し合っていたものらしい その真唯中へ今度は逆にこちらから手榴弾の雨だ…
 たった数人で二百も それ以上も居る敵を殲滅 正に近來にない大殲滅戦であり大快戦であった
 …やがて夕闇近く西門と北門の間付近の敵陣を占領して態勢を整へ夜を徹す⁽⁶⁹⁾

図9 (滕縣付近敵情要図Ref. C11111170400. No.1555)

(68) 「滕縣附近戦闘詳報 (第十一号)」 JACAR : Ref. C11111170200. No.1485.

(69) 「滕縣内城突入前後に於ける感想 (安田少尉記)」 JACAR : Ref. C11111170600. No.1569.

四川軍740団副団長何焜榮等の記録によると、王銘章はこの時、西門からの撤退を計画していたが、部署するまえ日本軍が突入し、何は西門確保の命令を受け西門に走った。

当時西門は土囊で封鎖され、一人しか通れない通路が残っている状態である。兵士たちは我先に脱出路に殺到し、押し合いへし合いで秩序が乱れていた。まもなく城壁上から、敵の突撃隊が現れ、城壁から機関銃、手榴弾で我軍を攻撃した。旅長呂康は頭部、汪朝濂副旅長は胸部を撃たれて負傷し、税師長代理は護衛兵数名による懸命の救出で

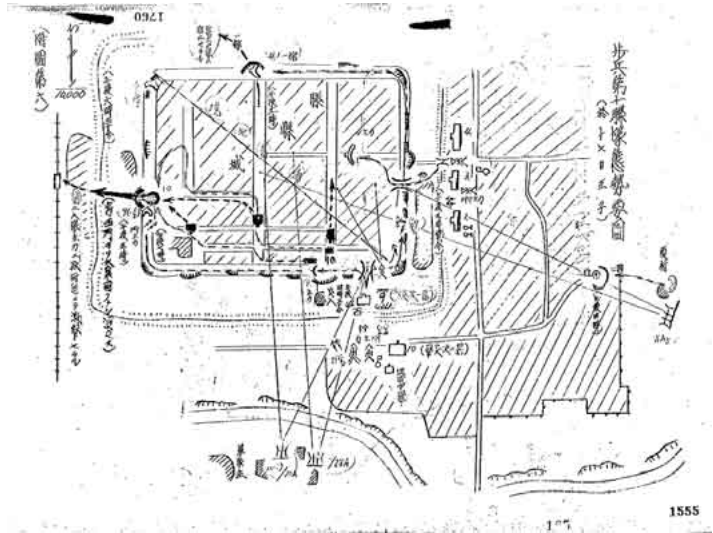


図9

脱出し、何焜榮、及び師部参謀処長税斌、参謀張岐らも間一髪で命辛々に城門を抜けた⁽⁷⁰⁾

この記録から、落城後、城内の四川軍司令部の一団が争って残敗兵とともに西門から脱出している様子が窺える。この脱出劇の最中、西城門は第9中隊に制圧されたため、遅れた王銘章師長、趙渭賓参謀長はこの場所で遭難した。時間は午後五時半頃と思われる。次の日の戦場点検の際、「西門外ニ第122師参謀長少將趙渭賓ノ死体ヲ発見セリ」と聯隊の戦闘詳報が記録している⁽⁷¹⁾。

師長王銘章の死に関して、第十聯隊関連の資料には記録されていない。中国側もいろいろの説があるが、のち王銘章の死体を探し当て回収した同行副官李少坤の回想が一番正確だと思われる。それによると、日が暮れる前、王は「西門外の濠の近くで、城壁上からの射撃」を受け死亡したという⁽⁷²⁾。午後五時半あたりであろう。「参謀長趙象賢（趙渭賓）、副官羅辛甲も壕の近くで戦死した」とも証言しているので、落城後、司令部の将校一団が西門から逃れようとし、王銘章ら数名は城壁からの射撃を受け死亡したと思われる。

ほぼ同じ時、北門に敗走した124師参謀長鄒紹孟は、50名の警護兵に擁され北門から脱出した

(70) 前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》120-121頁。

(71) 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1487.

(72) 前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》160頁。

が、城外で待ちぶせた第12中隊の狙撃を受け死亡した⁽⁷³⁾。こうして日没前、四川軍の指揮系統は壊滅し、組織的抵抗は停止した。この後、東門の攻防を中心に激しい戦闘が夜半まで続けられていたが、下級将校の指揮による、局地的散発的抵抗であった。

これまで、滕県における四川軍の不屈な抵抗の神話をつくるため、部隊の城外脱出の事実すら伏せられ、守備軍3,000名が徹底抗戦を続け、全員は壮烈に殉国した、と描かれる作品が多い。

しかし、日本軍の記録では、すくなくとも西門から五、六百の敵軍が脱出成功したと記されており⁽⁷⁴⁾、午後二時半の砲兵観測班長から報告された「五百の敵退却中」の情報、及び北城門外で脱出する鄒參謀長一行50名の数を足すと、脱出者は1,200名ほどになる。中国側の回顧録類にも、城外への脱出が記録されている。例えば、滕県戦直後3月22日に作成した「北戦線《陣中日報》」において、731団1營の王江平らの部隊は北門から脱出し、最後235名の生還が確認された、という⁽⁷⁵⁾。他に午後九時頃北城壁から脱出した張宣武団長（東門守備の指揮官）を始め、「候子平營長以下2-300人」の記録もある⁽⁷⁶⁾。他の零細の脱出記録⁽⁷⁷⁾を足すと、城内守備部隊の中、少なくとも半分にあたる1,500名が落城の前で、城外に出たと思われる。もちろん、脱出したものも、すべて生還したわけではなく、とくに駅周辺で待ち伏せした第Ⅱ大隊の邀撃で多くの犠牲を出し⁽⁷⁸⁾、また、鉄道沿線で南下途中、あるいは微山湖渡河中、日本軍の追撃を受け、さらなる犠牲者が増えた。

滕県城西門ヨリ脱出セシ敵ノ一部ハ鉄道路線以西ノ地区ヲ臨城韓莊ヲ経テ大運河南岸地区ニ退却セルモノアリト雖モ、独山湖微山湖ヲ渡リ其西方地区ニ退却セシモノ多ク最早認ヘキ戦闘カヲ留メサルカ如シ⁽⁷⁹⁾

3-3-6 知られざる事実

注目すべきは、滕県の抵抗は決して司令部の潰滅で終わったのではないことである。防御堅固の東門はまだ落とされておらず、第Ⅲ大隊も、赤柴聯隊長の命令を守って掃蕩担当の市街地南西エリア以外、一歩も前進しなかったためである。赤柴の命令では、城内東南角から西北角に「掃蕩地境」を引き、西南部は第Ⅲ大隊の担当、東北部は第Ⅰ大隊に分けた。先に入城した第Ⅲ大隊は南城

(73) 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR : Ref. C11111170200. No.1485.

(74) JACAR : Ref. C11111170200. No.1485.

(75) 滕県戦直後3.22日北戦線《陣中日報》の記事なので、235名の生還の信頼性は高い。前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》140頁。

(76) 東門守備の122師王志遠旅長も、張宣武団長もこの脱出で生還している。前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》92頁、126頁。

(77) 370旅 呂康旅長も夜、32名の手兵によって北門から脱出した（「呂立南將軍訪問記」、前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》、239頁）。

(78) 「適時停車場方面ニ進出セル第二大隊ノ為邀撃セラレ茲ニ殆ト全滅スルニ至レリ」「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR : Ref. C11111170200. No.1485.

(79) 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR : Ref. C11111170200. No.1483.

壁、西門、西城壁および城内の南西部をほぼ制圧してから、さらなる戦果拡張を止め、第I大隊の担当エリアに入らず、夜を迎えた（図8参照）。

一方、第I大隊は計画通り東門南の破壊口に突入できず、失敗を重ねた。

我重砲ニ依リ破壊セラレタル外城突撃口ハ最モ堅固ナル東門側防機関ノ直下ニアリテ瞰制セラレ且敵手榴弾ノ投擲距離内ニ在リ之加外壕ノ側壁急峻ニシテ壕深亦タ深く我工兵ニ依リ豫メ準備セル突撃橋ハ尺度不足シ忽チ死傷者続出セン為一氣ニ突入セウルヲ得ズ続イテ好機ヲ捕捉スルニ努メ午後九時四十分遂ニ城壁ニ突入シ北方ニ戦果拡張シ続イテ午後十一時迄ニハ北門ヲ占領ス⁽⁸⁰⁾

すなわち、第I大隊が苦勞の末やっと突入成功したのは21:40であり、さらに東城壁に沿って戦果拡張し、北城門に到達、占領したのは、夜間の23:00であった。21:40突入の記録は、前掲付図第六に記録されているので、記録ミスではないだろう。夜戦は不得意なので、第I大隊は北門を占領しても、城内の掃蕩を行わず、夜明けを待つことにした。

以上から分かるのは、四川軍の一部は、司令部壊滅したあと、なお四時間以上東門を死守し、北門が制圧されるまで六時間あまり、抵抗し続けたことである。また、城内東北部の市街地は、翌18日朝まで、日本軍の掃蕩は入れなかったことである。

残念ながら、この城東北部の抵抗について、中国軍側の複数の戦闘詳報にも、また複数の回顧談にも全く触れられておらず、東門防御の最高責任者張宣武団長も、王志遠旅長も、東門落城の時間さえ把握できない有り様である。ほとんどの説では、南の突破と同時に東門も制圧された、という。張は回想録において、自分は午後九時前後（一説では午後八時⁽⁸¹⁾）、侯子平營長とともに北門から脱出していたとしている。この記述にもし間違いがなければ、東門が陥落前の逃走行為ではないか。逃げる指揮官たちの武勲を讃える前に、こうした歴史に忘れさられた、抵抗を続けた無名戦士の事績をもっと顕彰する必要があるのではなかろうか。

3-3. 3月18日の城内掃蕩

戦いは北門が占領された17日の深夜十一時で一旦終了し、城内の北東部市街地に生き残った四川軍の零細部隊は、夜暮を利用して城壁からの脱出を図ったと思われる。夜が明けると、第I、第III大隊はそれぞれ担当のエリアで最後の掃蕩を始めた。

⁽⁸⁰⁾ JACAR : Ref. C11111170200. No.1486.

⁽⁸¹⁾ 前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》24頁。

第一、第三大隊ハ十八日朝来各々担任区域内ノ掃蕩ヲ行ヒ工兵隊ハ地雷除去ニカム敵ハ尚家屋ニ拠リ手榴弾ヲ投シテ執拗ニ抵抗ス尚既ニ便衣ニ着換ヘタルモノアリ之ヲ唯何スルニ忽チ拳銃手榴弾ニテ応酬スル等警戒ヲ要スルモノ多シ、…午後二時頃ニ至リ概ネ掃蕩完了セシヲ以テ更ニ各隊ニ敵ノ遺棄死体数ノ精査並鹵獲兵器ノ収集ヲ命ズコノ際西門外ニ第二百二十二師参謀長少將趙渭賓ノ死体ヲ発見セリ⁽⁸²⁾。

中国側の記録ではこの時、城内に残された部隊は数百人がいる、としている。日本軍の掃蕩中、局地の抵抗、戦闘は昼ころまで続けられていたと思われる。掃蕩後の戦場風景は地獄さながらの悲惨さであった。

滕県場内外ニ於テ殆ド殲滅セラレタル敵ハ伏屍墨墨トシテ横ハリ之カ死体ノ始末ニ付テハ幸イ城内ニ設ケラレタル紅卍会ニ依リ比較的敏速ニ処置セラレタリ

滕県攻撃ノ敵敵ニ与ヘシ損害ハ遺棄死体ノミニシテモ其数三千百ヲ算スルニ至リ⁽⁸³⁾

3,100の「遺棄死体」は、最後の戦場点検の際計上された数字と思われ、城内だけではなく、東関（外城）、西門外、滕県駅周辺を含む、第十聯隊の戦闘エリアにおける総ての死者の合計であろう。問題はこの「遺棄死体」はすべて戦闘員なのか？民間人が含まれていないか？なぜ「死体」のみで、負傷兵の記録はなく、捕虜の数も僅少なのか。実はここでは南京事件を思わせる大量虐殺が行われていた。紙幅の制限で、この問題についての考察は、別稿に譲る⁽⁸⁴⁾。

13:20第十聯隊本部は城内四川軍122師の司令部跡に進駐し、戦場整理がほぼ終わった13:00、第4中隊を先頭とする一部の先遣部隊は、支隊の自動貨車（トラック）で臨城にむけ出発した。

4. 戦果の統計と戦闘分析

4-1. 戦果統計

三日間にわたる戦闘の結果について、戦闘詳報の附表を参考に、次のようにまとめた。

(1) 死傷：

第十聯隊側の参加者3,130名（非戦闘員を含む）、負傷130 死亡16。配属、協力部隊の2,157名について、統計が無いため不明である⁽⁸⁵⁾。

四川軍側は参加者122師と124師の一部推定3,000名（城内、周辺）で、死傷1,500-2,000と推測する。

⁽⁸²⁾ 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1486, 1487.

⁽⁸³⁾ 「滕縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1489, 1499.

⁽⁸⁴⁾ 「滕県作戦における日本軍の虐殺記録—日本軍資料の盲点をつく」『年報日本現代史』第20号、2015年5月、刊行予定。

⁽⁸⁵⁾ 独立機関銃中隊の151名以外、ほとんど第一線に出ない砲兵である。敵側も迫撃砲3門しかなかったため、後方の砲部隊に与えた損失は僅少と思われる。

(2) 鹵獲：捕虜：23名

武器：小銃 389挺、自動小銃 34挺、水冷式機関銃（重機関銃）10挺、モーゼル拳銃 8挺 チェック（軽機関銃）1挺、迫撃砲 3門、迫撃砲弾 252発、手榴弾 3,095発

図10（膝縣附近戦闘詳報（第十一号）附表Ref. C11111170700. No. 1584）

(3) 消耗：

41式山砲弾（聯隊砲）440発、92式歩兵砲弾（大隊砲）434発、92式37耗砲弾（聯隊速射砲）93発、89式重擲弾筒榴弾 709発、92式重機関銃弾54,100発、38式歩兵銃弾46,791発、丙催涙筒 65枚。

図10

なお、配属また協力部隊として戦闘に参加した野砲兵大隊、野戦重砲第二聯隊、支那駐屯軍野戦重砲兵の各種重火砲の消耗について、統計がないので精密に把握できないが、他の戦闘例を参考にすれば、約1,000-1,500発が使われていたのではないかと考えられる⁽⁸⁶⁾。

(4) 第十聯隊の自己反省

第十聯隊の戦闘詳報における「自己評価」を摘記すれば、

- 一、防御の堅い北方向から接近せず、迂回して東から膝縣城に接近した戦術は成功。
- 一、防備は弱く家は密集しない東北角を選ばず、守備の堅い東関、東城門の攻撃は失策。
- 一、敵に対する火砲の圧制が不十分の時、一気突入の命令は「徒ラニ損害ヲ多カラシムノミナラス 死傷続出ノ為却テ志気ニ及ホス交感大ナルモノアリ」
- 一、指揮中枢たる敵の指揮官及び幕僚の減殺は重要である⁽⁸⁷⁾。

⁽⁸⁶⁾ 野戦重砲兵第三聯隊の両大隊24門15種榴弾砲、1938年6月3日一日の作戦消耗の参考数値から推算。重砲一門の平均消耗17.3発×30（膝縣戦闘日平均重砲数）×2日=1,038発+α（75mm8門、105mm火砲12門の発射速度はやや早いための上乘せ）。「野重第三聯隊兵器損耗表、其ノ二」Ref. C11111365900. No.694.

⁽⁸⁷⁾ 「膝縣附近戦闘詳報（第十一号）」JACAR：Ref. C11111170200. No.1496-1497.

4-2. 戦闘の分析

以上の実証を通じて、滕県作戦の一部始終がほぼ明らかになった。中から読み取れる情報を次のようにまとめた。

(1) 重火器の差は歴然

第十聯隊の戦闘員数は決して四川軍より多いのではない。最前線の戦闘部隊は東、南の二方向を合わせても四個中隊（約600名）に過ぎず、破壊口突入の担当も小隊の単位で数十名にすぎない。一方、この600名戦闘員を支えたのは32挺の重機関銃と最大時50門以上の火砲であり、支援部隊を合わせると、最大時馬2,000匹（火砲、弾薬搬送）、人数5,000名を超えている。戦闘集団は重火器、支援部隊、各配属兵種によって構成される近代的戦争の特徴が見られる。また日本軍の歩兵部隊といっても、第十聯隊の一大隊約1,000名の中、重機関銃8挺 軽機関銃18挺、砲2門（定員満員時）が装備されている。これに対して四川軍はまだ人数+小銃と言ったような旧式の編成、装備で、特に重火器が極めて貧弱であった。鹵獲表から見ると、滕県守備軍には数門の迫撃砲（鹵獲数は3門）と十数挺の重機関銃（鹵獲数は10挺）しか所有しなかったことが分かる⁽⁸⁸⁾。

(2) 日本軍を悩ませた戦術

装備の格差にも関わらず、四川軍が有効に抵抗出来た理由は、市街戦と手榴弾攻撃の戦術であった。外城の東関において、日本軍が突入してから市街地全体を制圧できるまで24時間以上の苦戦を強いられた。家屋、土壁の銃眼を利用する狙撃と、突撃、逆襲を繰り返す白兵戦は敵戦闘員の死傷を増加させ、重火器の優勢を弱めた。また、突撃に対して、城壁の上から一斉に大量の手榴弾を投げ込む戦術も、四川軍側の火力の弱さをある程度カバーできた。戦いの過程から見れば、守備軍に有利な要件は、城壁の高さ、堅牢性ではなく、寧ろ外城の存在と、城壁を囲む密集する民家の存在にあった。日本軍の重砲による突破口の完成はさほど時間がかからなかったが、突破口への接近と攻城の準備は、市街戦によって阻まれ、いたずらに時間を要した。

(3) 日本軍の戦闘指導の失策

一つは、戦闘詳報が自ら認めた東関、東城門の目標選定の失策と、それへの固執である。北門の攻撃を避けたのは正解だったが、東門も東関を屏障にして厳重な守備態勢が敷かれた。外堀の深さ、広さ、突出した城門望楼よりの側射、手榴弾攻撃によって突破に困難を極めた。それにも関わらず、この作戦は撤回されず、最後まで固執され、南側の突入より五時間遅れの結果となった。

もうひとつは、協力作戦の問題である。赤柴の命令で城内の掃蕩担当エリアが分けられていたので、早く突入して大勝を得た第三大隊は、城内の南西部（担当エリア）を制圧してから、さらなる前進はしなかった。一方第一大隊の方は突入にてこずり、東門南を陥落させたのは予定より五時間

⁽⁸⁸⁾ なお、124師372旅の損失表を見ると、参加部隊2,216名の中、重機関銃3挺、軽機関銃9挺（前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》43頁）。124師370旅の場合、2,657名の中に重機関銃14挺、軽機関銃11だった（前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》36頁）。

半後の21:40であり、深夜23:00やっとなら壁上で北門に辿り着いたので、市街地の制圧はできなかった。まさにこの隙を利用して、四川軍の一部は深夜、北門、北城壁から脱出に成功したのである。

(4) 兵敗は山が倒れる如し

四川軍大敗の理由は、もちろん装備の格差にあるが、注目しておきたいのは、3月17日午後4時ころからほとんど一瞬の内に、総崩れした状況である。

敵側援軍の到達（第Ⅱ大隊）及び退路の切断、友軍側援軍到着への絶望感、及び内城への敵軍突入により、四川軍全体の士気と戦意は一気に崩れたのではないかと考えられる。とくに16:05第9中隊と第10中隊が城内に突入すると、四川軍の指揮系統が麻痺し、多数の兵士も、司令部の高級将校も我先に唯一の逃げ口である西門に殺到した。城門上の掩護を失った状態で狭い通路にて押し合いへし合い、大量死傷の悲劇を生み出したのである。中国側の各種の記録を合わせてみると、ほぼ同じ時刻、つまり暮れるまでの17:30-18:30の間、122師王志遠副師長、124師税梯青師長代理、124師370旅汪朝濂副旅長、何焯榮団長、及び師部参謀処長税斌、参謀張岐ら司令部の構成員が西門から脱出し、遅れてきた122師長王銘章、参謀長趙渭賓は脱出の途中、西城門外の濠端で犠牲になった。西門が封鎖された後、敗残部隊の一部は城北の方に逃れて息を繋ぎ、東門が落とされる前北門（城壁）から脱出した。124師の呂康旅長、張宣武団長、候子平營長等はここから脱出した、との記録がある。124師の参謀長鄒紹孟も、落城する前北門を脱出している。

つまり、落城の前から四川軍の士気が動揺し、落城と同時に城内で大混乱が生じ、将校も兵士も抵抗を放棄し城外に逃れようとした。実際この時、東門において、守備部隊による有効な抵抗が続けられており、城内に城外よりさらなる密集の市街地が広がっていた。もしこの時、有効な市街戦抵抗、あるいは援護撤退を組織できれば、友軍の死傷を抑え「滕県保衛戦」の光輝も、少し増すのではなかろうか。

おわりに

この論文は、既に政治、宣伝によって神話化された歴史物語⁽⁸⁹⁾を、確かな史料考証により、事実に近い実像に還元する作業である。ただ、筆者の狙いは、それだけに終わらない。この作業は同時に、これまでの歴史記録の方法への問いかけでもあり、滕県の事例を通じて読者に以下の二点の方法論の重要性を訴えたい。

一、歴史研究において、記録資料の重要性を認識し、できるだけ口述、回顧、経験談のような方法（オーラルヒストリー）を排除し、まず可能な限り、当時の記録資料を使うことである。オーラルヒストリーによる記録はあくまでも補助的、参考的方法に過ぎず、この種の記録には時間、場

(89) 例えば、日本軍について、最大三万人の攻城部隊、5-60機の爆撃機、数十両の戦車を動員した描写、この戦いで日本軍2000名を死傷させた描写、あるいは守備兵全員最後まで降伏せず、全員壮烈に殉国した描写など（前掲山東省政協文史資料委員会編《悲壯之役・記1938年滕県抗日保衛戦》、参照）。

所、過程など厳密さを要する部分で間違いを生じやすいだけでなく、時代、政治環境によって主観が入り、確実に歪を生じるからである。

二、政治、宣伝、娯楽と歴史事実を峻別し、歴史書を、パイヤスがかかりやすい民族史観、政治史観、娯楽史観から解放し、できるだけ事実に近い形で記録することである。もちろんそれには、小説家が作る物語のような面白さ、悲壮さと感動はないが。